

# 「ベネッセアートサイト直島を訪問して」

—2015 年度春学期 教育研究旅費補助支給プロジェクト成果物—



## 直島フィールドワーク実施の経緯と概要

森田ゼミでは、2年次の研究演習入門のまとめとして、「企業による美術館運営」というテーマに着目して春休みプロジェクトを行った。3年次の研究演習Ⅰにおいては、自然や建築物保護という観点をも視野に入れて考察を広げ、再度「教育研究旅費補助費」を取得してベネッセアートサイト直島を訪問した。2015年9月17日（木）～18日（金）の日程で地中美術館や家プロジェクトなどでフィールドワークを実施し、さらに、事前送付の質問リストを基に、公益財団法人福武財団、および、地中美術館運営担当の方からお話を伺った。

「瀬戸内海の風景の中、ひとつの場所に、時間をかけてアートをつくりあげていくこと—各島の自然や、地域固有の文化の中に、現代アートや建築を置くことによって、どこにもない特別な場所を生み出していくこと」を基本方針とする「ベネッセアートサイト直島」の活動や概要については、さまざまな出版物やベネッセアートサイト直島のHPなどに詳しい。今回、そういった詳細には敢えて触れず、私たちが実際に訪問して得た感想を綴ってみたい。

## 観光地と暮らしの場—二つの顔を持つ直島

### ➤ 25年の時をかけて

直島南部を人と文化を育てるエリアとして創生する「直島文化村構想」は1988年に発表された。ベネッセハウス、家プロジェクト、のれんプロジェクト、地中美術館、I♥湯、そして、後述する「南瓜」を始めとした屋外のアート作品などがそれである。この「文化村構想」は地域住民に大きな影響を与えている。

家プロジェクトによって、馴染みの場がアートの舞台となった。長い時間をかけて進められたその活動に、地域住民は自然と興味を持ち、彼らの協力を得ながら次第に完成され

ていった。この活動により、地域住民が村を掃除し、景観や美しさを意識するようになったという。また、島民は銭湯を特別価格で、美術館を無料で利用でき、いつでも芸術作品に触れることが可能になっている。著名な建築家やアーティストとの関わりは、島民にとって馴染みのなかった現代アートを身近なものにした。さらに、島に魅力を感じた観光客の増加により、トイレボランティアやガイドボランティアの実施、古民家カフェや民宿の開設など、住民をはじめ、島外の人までもが主体的かつ協力的に「ベネッセアートサイト直島」に働きかけるようになった。

こうした活動が、やがてアートの島として海外の有名旅行雑誌にまで掲載され、今では国内のみならず、アメリカや韓国、フランスといった海外からの訪問客数の多さが特色でもある。その魅力の一つは、観光客が得られる「体験の重層性」であろう。ベネッセハウスは宿泊施設でありながら、美術館の役割を担っている。家プロジェクトやのれんプロジェクトでは、アート作品だけでなく、そこで生きた人々の歴史や生活を垣間見ることができる。また、地中美術館やI♥湯では、ただ作品を鑑賞するだけではなく、自身がその空間に入って「感じる」ことができるのである。

### ➤ 世界を魅了する直島での体験

大がかりなプロジェクトが 25 年の時をかけて、地域へ浸透し、地域を活気づけてきた。しかし、住民にとって、直島は観光地である前に、暮らしの場である。島北部は産業エリア、中央部は生活・教育エリアとなっている。生活の場としての役割にも重きを置いているために、「自然、そしてその中で営まれてきた人々の暮らし」と「アート」の両面に触れることができる。それらから個々人が自由に感じる、考えるという主体的な体験が、世界中が直島に魅了される最大の理由だと感じた。

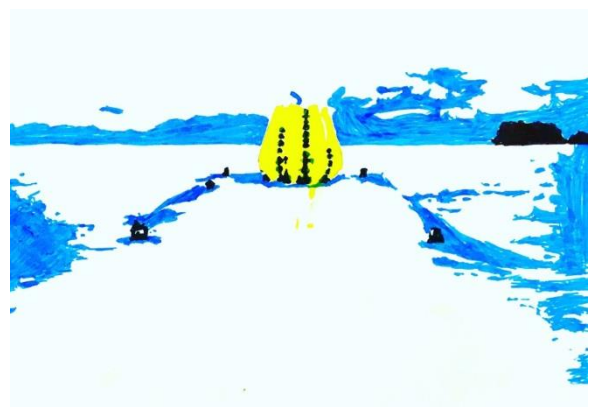
## 自然とアートの融合—コントラストが生み出すもの

### ➤ サイトスペシフィック・ワーク

「自然とアートの融合」が直島の試みであり、その魅力であると一般に言われる。実際、直島に設置されたアートの多くは、「サイトスペシフィック・ワーク（“site-specific work”）」、つまり、置かれる場所の特性を生かして制作された作品である。瀬戸内の自然や島の暮らしを背景に、それらを前提として成立しているのである。現代アートの作品とそれを取り巻く景観が融合していると言われる所以であろう。しかし、果して本当に「自然」と「アート」は見事に融和していると言えるのだろうか。

### ➤ 黄色いかぼちゃと赤いかぼちゃ

直島のシンボルとも言える草間彌生氏の「南瓜」（栈橋の突端に置かれた黄色いかぼちゃ）は有名であるが、フェリーを降りると目に飛び込んでくるの



は、同じく草間氏による「赤いかぼちゃ」である。共に、原色の黄色や赤の地色に大きな黒の水玉が配されている。自然の海を背景にした原色の巨大なかぼちゃは、その存在があまりにも唐突である。また、海の色や波打つ水面の光の反射は、季節や天候、時刻によって、その表情を刻々と変えていく。一方、巨大なかぼちゃのアートの色は不変であり、ずんぐりとした丸いフォルムはその不動性や不変性を強く印象付ける。明らかに、自然界に置かれた異物である。すなわち、「自然とアートの融合」というよりも、むしろ両者が「見事なコントラスト」を呈しているのである。

直島のサイトスペシフィック・ワークは、島の景観に加え、安藤忠雄氏の建築空間を意識して制作されている場合が多い。それ自体が「巨大なサイトスペシフィック・ワーク」であると言われる地中美術館を考えることで、自然とアートのコントラストが生み出すものについて理解が深まるかもしれない。



## 地中美術館—直島最大のアート

### ➤ 空間とアートの調和

「赤いかぼちゃ」に出迎えられてから直島を反時計回りに歩くこと約30分、地中美術館は、その名のとおり建物の大半が地中に埋め込まれた造りになっている。館内には、クロード・モネ、ジェームズ・タレル、ウォルター・デ・マリアの作品が恒久設置されており、建物と空間と作品とが調和した不思議な空気が訪れる人を迎え入れる。美術館のスタッフは白い制服をまとい、鑑賞の邪魔にならないように静かに立っている。その独特な立ち姿には、「地中立ち」という名がついているようだ。空間の邪魔にならないよう、スタッフが座るための椅子を置かないという考えからも、地中美術館がいかにアートとしての空間を大切にしているかがうかがえる。

モネの部屋では、白で統一された空間の中にモネの睡蓮が展示されている。床に敷き詰められた大理石のタイルは一枚一枚が丸く削られて、どこことなく柔らかい雰囲気がある。この部屋は寝転んで絵を鑑賞することができるようになっており、自然光を取り入れているため気候や時間が変われば作品の色味も変わっていくようになっている。ゆえに、地中美術館は恒久設置ながらも、訪れるその日ごとに違う表情を見せてくれるのである。自然を空間の中に取り入れ、展示された作品だけでなく空間そのものをアートにしている、その最たるものとも言えるであろう。

## ➤ 自然とコンクリートの対比

安藤忠雄氏の設計した地中美術館は打ち放しのコンクリートが冷たく存在感を放っているが、居心地の良さをも感じさせる。なめらかな灰色の色合いも、その存在を主張しすぎることなく、自然の美しさを損なうことはない。コンクリートから受け取れる印象としては、近代的であることや人工物感、また、居住空間の安定性などがあるだろう。人がより良い生活のために生み出したコンクリートなどの人工物は、確かに住み良い環境を私たちにもたらず。しかし私たちは、コンクリートの建物の中から直島の豊かな自然を目にしたとき、ほっと一息をつく。人工物と自然との境にあって、私たちの心に訴えかけるものは何なのか。

昨年私たちが訪問したサントリー美術館の設計者、隈研吾氏の建築観に、「負ける建築」というものがある。これは高層ビルや画一化された住宅などの異質なものではなく、周囲の環境に溶け込むような柔軟な建築を目指すべきだという主張から生まれた言葉である。実際、サントリー美術館は、木や和紙といった素材を美術館の意匠に用い、ウイスキーの樽材を再生利用しているのである。この考え方からすると、安藤忠雄氏の用いるコンクリートは「異質な」部類に入るであろう。しかし、その異物感、そして安定した人工的な材質は自然の美しさを際立てる。両者あってこそ、そのコントラストが生み出す美を見出すことができ、また双方の良さに気付くことができるのではないだろうか。

周囲に溶け込むのではなく、あえて自己主張することによって、「自然と人間の間を考える場所」という地中美術館のコンセプトを体現した建築—ベネッセグループの企業理念である Benesse 「よく生きる」にも通ずる、直島最大のアートである。

## 最後に

今回の訪問に際して、半年前の準備段階から公益財団法人福武財団にご助力を頂き、また、9月のフィールドワーク実施当日においては、地中美術館運営の方々にも貴重な時間を割いて頂いた。こちらの不躰な質問に対しても丁寧にご対応頂いた福武財団の皆様にご心より御礼を申し上げたい。

## 参考文献・URL

秋元雄史、江原久美子 編(2003) *Remain in Naoshima—Naoshima Contemporary Art Museum*、ベネッセコーポレーション出版。

安藤忠雄 (2012) 『安藤忠雄 仕事をつくる—私の履歴書』、日本経済新聞出版社。

隈研吾 (2004) 『負ける建築』、岩波書店。

福武 総一郎、安藤忠雄 (2011) 『直島 瀬戸内アートの楽園』、新潮社。

マガジンハウス 編 (2011) 『CasaBRUTUS 特別編集 安藤忠雄の美術館・博物館へ』、マガジンハウス。

茂木健一郎、NHK「プロフェッショナル」制作班 編 (2013) 『プロフェッショナル仕事の流儀 限 研吾 建築家 “負ける” ことから独創が生まれる [Kindle 版]』、NHK 出版。

2014 年度 森田ゼミ「企業による美術館運営を考える」成果報告  
([http://www.kwansei.ac.jp/s\\_economics/attached/0000077402.pdf](http://www.kwansei.ac.jp/s_economics/attached/0000077402.pdf) 2016 年 3 月 27 日アクセス)

「ベネッセアートサイト直島 HP」(<http://benesse-artsite.jp/> 2016 年 2 月 15 日アクセス)

2016 年 3 月 27 日

文責：直島プロジェクト成果物作成ワーキンググループ

橋本英美、水原梨奈  
楠元俊平、松原有志、森田由利子

イラスト：藤澤一浩

写真：向井綱彦